

もじぶへ。-It's time to go into mourning-

春原奈々子

「もう嫌だ」

吐息混じりの弱音が聞こえ、ナリタは足を止めた。そうでもなくてもハネダが先に歩くのをやめたのだ。その腕を掴んで歩いていたナリタが動けなくなるのは必然だった。めちゃくちゃに力を込めて引きずらないかぎりには。振り返る。ハネダはゆっくりとうつつむけた顔を上げた。

「……ぼくは小学生になりたいんだ!! ちっちゃくてふわふわきらきらした小学生に!! 膝こぞうもすねもあそこもどこもかしこもツルツルの! ランドセルも短パンもタンクトップ一枚でも許される小学生に戻りたい!!」

周囲の人間が一斉にぎよつとしたのがわかる。近くの中学校のブレザーを着た少年が、そんな変態臭いことを叫べばそれは当然の反応と言えた。固まったのはナリタとて同じだった。まるでつむじからかかとまで氷が滑って落ちたような感が彼を襲う。しかし彼の時間を止めたのは、ハネダの瞳に灯る鈍い輝きだった。その目は、ナリタの緩やかか停止しつつある拍動を、再び動かし得る魔力を持ってい

た。

「君ならできるだろ。なんだってできるんだろ……頼むから、お願いだから」

思い切り歯噛みして、ナリタはハネダの腕を掴みなおす。道に長く影を伸ばしながら、二人は歩いていった。

ナリタの家、彼の部屋でハネダは頭を押さえながらぼんやりとしている。

彼は疲れきっていた。今日という日はナリタの「お前は魔法少女だ。魔法少女だった」という衝撃的極まりない発言から始まった。郊外にある動物園まで続くモノレールに乗り込みながら、彼は口を開いたのだった。普段大人びた態度で常識人を気取る彼が、そんなブツ飛んだことを言うのかとハネダは笑ってみせたのだが、隣に座る少年の陰の落ちた表情は、冗談として混ぜ返すことをさせなかった。

俺が思うに、と彼の話は続く。どうやら俺たちは運命を誰かに操作されているようだ。

「それは神様は存在するってこと?」

「そこまで大層なものではなくて。俺たちは誰かに作られた、物語の登場人物である可能性が高い」

「お前は第四の壁という言葉を知っているか？ 知らんよ  
うだな。何も返事をしないうちからナリタは続ける。俺た  
ちはこれからそれを破る方法を考えなくてはならないと。

彼の説明は淀みなかった。頭の中で何度も、こう言おう  
と考え、練習してきたかのような話し方だった。ハネダが  
「チトセ」というちんちくりん謎生物の力を受けて、魔法  
少女に変身できるということ。ハネダの変身した姿である  
少女というのが、童顔かつわがままボディという奇跡のギ  
ャップを身に宿した超絶美少女であること。ナリタは悪役  
で貧乳改めスレンダーな負けず劣らずの美女に変身し、そ  
して二人は何度も戦ったということ。ハネダの武器は剣で、  
ナリタの武器はノート。

「ノート？」

「素晴らしい代物さ。『ハネダは俺を攻撃できない』とでも  
書けばその通りになる」

「なんだそれ卑怯じゃないか。君が勝つに決まってる」  
「そう一筋縄でいかないから不思議なものだな」

なぜ戦うのか。それはナリタが世界征服を企んでいるた  
め。それだけでなく、ナリタが女版ハネダを配下にした  
と願っているため。

俺たちはこしらえものさ。誰かの筋書き通りに踊る人形。  
そうナリタは言った。彼の表情には常に鋭い冷たさが宿つ  
ている。しかし窓の光を受けた色の薄い髪はきらきらと輝  
いていた。ナリタの性格の悪さはハネダが一番よく知って  
いるが、見た目だけなら、彼が悪役なんて信じられないと  
ハネダは思うのだ。

「おそらくはアニメだろうな」

「日曜日の朝にしてるみたいなの？」

「まさか。深夜アニメだろ。美少女美少年あるいはその絡  
みにハアハアする気持ち悪い豚共と妄想癖の激しい大人の  
お姉様方の両方に媚びたどっちつかずの作品。最後の一回  
は過激すぎてDVDにのみ収録とかそんな感じの有害極ま  
りないゴミ作品なのだろう。タイトルがひらがな四文字と  
かそういう安直な感じのな。しかし放送はいつかは終わる。  
筋書きはそこで途絶える。そのあとの物語の残骸はどうか  
な。どうなると思う。お前」

さあ、とハネダは返した。モノレールは揺れ、彼の頭は  
慣性に逆らわずに右に傾いだ。窓に頭をぶつけてしま  
う、と身構えた体は、しかし痛みを感じずに済んだのだ。窓  
とハネダの頭の間に、ナリタの手のひらが差し込まれて

いたおかげで。

「最近地震が多いと思わないか。俺たちの世界は崩れだしている。何人かはもう消えてしまったんだ。跡形もなく。お前、小学校の裏に銀杏の樹があったことなんて、とっくに忘れてしまったんだろうな」

ハネダは呆然としていた。ナリタはお前は記憶喪失だと告げられたからと解釈しようだった。しかしハネダの硬直は、かつて彼がナリタと一緒に出かけたときの映像、音が響りがいくつもいくつもあぶくのように連なって浮かびあがっては弾け、が脳内で繰り返し返された結果であった。

前、出かけたときは。……そうだ。ナリタはこうしてかばってくれはしなかった。ぼくは頭を派手にゴチンとぶつけて、そしてナリタは馬鹿にして笑っていた。たったいま思い出した。思い出す？ 彼と遠出をするのは今回が初めてなのに？

たくさんの人間の生涯が、一気にハネダの頭にのしかかった。自分の体ごと、黒い服を着た美しいひとに剣を突き立てたこと。ノートに書かれた呪われた言葉の数々。「今だっポ！ 攻撃するポー！」なんて戦闘中でさえうるさくって気が散ってたまらなかった、チトセの声とふわふわのた

てがみとピンと立った三角の耳。

思い出したよ。思い出した。何をと説明はできなかった。すべての記憶は複雑に絡み合っていて、一体全体どこで区切ればいいのかわからないほどのだ。ただ、ぜんぶ思い出した、とそれだけをハネダは隣に座る少年に向かって繰り返すのだった。

吠えて檻に体当たりをすることがあります。近づく際にはお気をつけください。いくつも注意書きのされた檻の前に、ナリタは立つ。吠え声と剥かれた爪が檻の隙間からナリタに向けられた。気性の荒いせいであまり人気のないライオンの檻のほど近くに、ハネダは座った。ナリタに走った一瞬の緊張をせせら笑うかのように、百獣の王はぴたりと吠えるのをやめ、恭しく首を地につけてみせるのであった。ちとせ、と呟きながらハネダはナリタを向く。ここまで連れてきてくれたのはそのためなのだろう。

「チトセなんだね」

姿を変えてもなお、主人を気遣う騎士の瞳がふたつ、鉄檻の向こうから覗いていた。もう声は聞こえない。ああ、ぼくにわかる言葉でしゃべってくれ。チトセも、ナリタも。そう願っても、彼らの感情は少しも交差しないのだった。

もうチトセと話せないのは、自分が中学生になってしまったからだろうか、とハネダは考える。日光も、睡眠も、栄養たっぷりの食べ物でさえ、この体には毒として作用したのだろうか。忘却は罪だった。成長は罰だった。ただ生きていだけなのになぜ、自分たちだけがこうなるのだろうか。ぼくたちは理想的な役者たれなかったのだろうか、とハネダは思い悩んでしまう。できることなら、と彼は願った。彼は時間を巻き戻すことを愚かにも望んだのだった。

帰りのモノレールで、再び車両が傾いたとき、ナリタは自分の左肩にハネダの頭をもたれかからせた。優しさに満ちた行動だった。しかし温度のある枕にありついたところで、ハネダは一睡もできやしなかった。

モノレールを降りて、街中で叫んでしまったことが彼の思うすべてだ。そうしなくては壊れてしまいそうだった。

部屋に一人きり残されて、ハネダは敵たるナリタの話したことについて考える。どこから、かすかにココアの香りがした。甘いものが好きなハネダのために用意してくれているのだろうか。あらゆることを忘れていたという事実よりも、片時も離れず傍にいたチトセと、檻を隔ててしか会

うことができないということよりも、慣れないナリタの気遣いの方がずっとずっと現実感を伴って胸を抉っていく。これからどうすればいい。何ができるといえるのだろうか。ハネダの頭はずきずきと痛む。

瞬間、世界が揺れた。ナリタの学習机の下にあわてて潜り込もうとして、ハネダは頭をぶつけた。その衝撃なのか地震のせいなのか、何冊ものノートがばさばさばさ音を立てて落下し、目の前に広がった。ナリタが武器とする魔法のノートではない。どこにでも売っているシンプルな大学習ノートだった。

・どうもこの世界を構成する要素が崩壊し続けているようだ。しかし私のノートに不可能はない。

・私の部下が消えていく。ハネダは元気だ。

殴り書かれた自分の名前を目にして、ハネダはそのノートを拾った。まだ揺れのおさまらない中で、陰になった机の下、ハネダはくせ字の飛び散るノートをばらばらとめくっていった。

・崩壊は止めようがないらしい。仕方なくハネダと二人、私のノートにそれぞれ自分のことを書き、明日の自分を保っている。

・ハネダは自分を蔑ろにする。チトセに重点を置いて記述しているのだ。確かにあいつがいなければ変身できないわけだが、いつか悪い結果になりそうで

・さわんないで だと さわんないで かーわーいーいー

・なぜ俺の話を理解しないのだあの馬鹿ハネダめ。処分処分

・やはりチトセを置いておくのはよくない。あいつのためにならない。とりあえず動物園に保護しておこう。……あれは何なのだろう。へちゃむくれの猫みたいなあれは。獅子？ ライオンにでもしておくか。

・盗聴器付きのペンは折られたらしい。しかしまだコンセントには気づいていない。気づかないだろう永遠に！

・体育倉庫でハネダが教師に襲われていた。だれかれかまわず愛想を振りまくからこうなるのだ。頭が足りない。私ものなのにつきかり汚されてしまった。愚かな豚に肅正を。

・豚のせいで近づくだけで怯えられてしまうではないか。処分処分。

・常に変身してくれないかなあ

・処分処分

・書くのに疲れてしまったとあいつがごねる。もう知らん。知らんといいながらハネダについて記述しておいた。私は何をしているのだろう。何が起きるだろうか

・あいつはチトセのことも俺のことも、魔法も、何も知らない少女になっていた。落ち込むことはない。私はずっとこうしたかったのではないのか

・最高の気分だ!! 奴を勝手にできるのは世界で一人俺だけだ。素晴らしい! ああ俺のすべてでもって彼女を愛すと約束しようじゃないか! なんて哀れで愚かで愛しいのだから!!

・風呂場であいつは死んでいた。赤い水につめたい体が浸かっていた。そんなに嫌だったのか。泣きながら悦んでいくせに。違う。違う。あいつは「殺してやる」とは決して言わないのだ。あの時も「死んでやる」とただただ呟いていた。自身を人質にするしかないように仕向けたのは俺だ。何度目だ。俺はどうしても忘れそうだから書いておくことにする。もとのあいつからのつながりは断絶した。これからどうする。どうする。考えろ。

・私はあいつの容れ物のみを信仰しているのではないのだということ。馬鹿馬鹿しいがそういうことだろう。

・俺の知っているかぎりの奴についての情報を書き込んだ。ああ。頼むから。

・ハネダ復活 私に不可能はない!

・逆に考えたら俺に心底惚れ込んでる美少女ハネダが作れるのでは? なぜ今まで考えつかなかったのだろうか! 俺は馬鹿か! いや天才だ!

・いい気味だ。笑いが止まらない。

・ハネダはそんなこと言わない……

・むなしくなった。処分処分

・もとのハネダ復活 大体慣れてきたような

・ハネダは既視感の蓄積でイカれてしまった。私は何もできなかった。仕方ないので時を進めることにする。二人そろって中学生だ。さてどうなるか。

・彼女だと 笑えるあははいや笑えない。なぜよりもよってそいつを選んだんだゲロ豚糞ビッチじゃねえか俺の

ハネダはそんな奴にふりむいちゃいけない。豚は処分処分。

・ハネダはなぜ泣くのだろう。俺が泣かせたのか。うっはたまらんね。けど処分処分。

・永遠を留めておけたら、固定し得たらどんなにいいか。

・私の能力が条件付けと予知じゃなく時間操作だったらどれほど私は救われただろう。詮無いことだが。

・時間操作だったらなあああああ時間操作って何だからスポーツっぽいなああ強キヤラ臭しかしねえぜ！ やったね！ だいたいこんなバカエロ作品で心理戦とか誰が得すんだよ。バトルがわかりにくいんだよ。読み返せる漫画でやるならともかく。制作者はバカだぜってーバカだ。

・心理戦……そうだ我らは読み合いを繰り返していたのだ。ハネダはバカかわいいが本物のバカではないということだ。慎重に慎重をかさねよう。

・ファウストの如く言えるのなら。

——「時よ止まれ！ 汝はいかにも美しい」

そのあとメフィストフェレスに魂を奪われたってかわない。認めたくはないがこうなれば仕方ない。俺はあいつを消失させたくはない。あいつのいない世界で生きていたくもない。

・愛と言っていいだろう。俺は戯れの実験をしていたわけではない。これだけ失敗を繰り返したが一回一回が戦争だった。本気だったのだ。

・時を越えてまでの思いを、これを愛と呼ばずしてほかに何と名付けようか？

・風化と崩壊は進む。どうすれば守れるか。

・いいかげん報われたい。

・処分処分処分！

・目を思い出して眠れなくなった。奴はいつも暴れること

をしない。なぜ俺は奴を殺さなくてはならないのか。俺が。よりにもよって俺が！

・明日すべてを話そう。一人では耐えきれない。

息を飲み込む音と、お前、という声にハネダは顔を上げた。彼が手にしているのが自分のノートだと気づいてナリタはあからさまに怯えていた。ハネダは何も考えずに口を開く。つまりはこの状況にあまり似つかわしくない言葉を発する。そうして彼は散々に、この哀れな悪役を我知らずいたぶってきたのだ。

「ナリタ、君、ぼくのこと好きでしょ」

「はあああ!! 誰があんだって? えっ何なになったく聞こえませんかあ」

返せ、とナリタは荒つぽくハネダの手からノートを奪った。ハネダはまったく怯まずに繰り返す。

「君ってぼくのこと好きだったんだね初めて知ったよ」

「違う! 間違ってもお前じゃない! 変身した後の姿だ俺が好きなのは」

大仰なため息のあとで、あんなに言ってきただろうが、

とナリタはぼやく。地獄の華がどうか、永遠がどうか、おしべとめしべがうんぬんだとか、戦闘中にぶつけられた、いまいち意味のわからないでいた言葉の数々は、実はプロポーズじみた意味を持っていたのだろうか、とハネダはぼんやりと思いつ返す。

「ぼくは君のこと好きにはなれないけれど、ほんとうに好きにはなれそうにないけれど、君のしてきたことには感謝してる。チトセを守ってくれていたんだね」

ナリタはがりがりと頭を掻いてそっぽを向く。

「ねえ、同じことを何度君は繰り返したの」

ぼつりと聞こえた弱々しい声をハネダは拾った。

「にじゅう?」

「……百二十」

そんなに。沈黙が落ちた。ナリタはふとハネダに視線をやって、そして呼吸を止めた。彼の瞳はいよいよ神がかり慈愛に満ちて鈍く光っていた。そうナリタには感ぜられた。彼は主人公なのだ。たとえ筋書きというものが彼らの世界から失われたとしても、永遠に焦点は彼に当たりつづけるのだった。

「もう頑張らなくていいんだよ。君だって疲れたろう」



「疲れなんて！」

ナリタは鼻で笑ってみせる。

「俺が何のためにやってきたと思っっているんだ。そうだ、いつも」

いつも。声は震えかすれていく。ハネダはナリタの背にそっと手を当てた。

「一緒に生きようと言っているのにお前はいつも捨て身じゃないか。嫌いだよお前なんて。戦うのがヘタクソなド畜生が。人の気も知らないで。俺を置いてくじゃないかお前は。俺を一人にするじゃないか」

「今度こそ一人にはしないさ。ぼくは一緒に死のうと言ってる。……ごめんね」

終わりにしよう。小学生にも、魔法少女にも戻れなくていいから。

惚れたが負け、は常にナリタにとっては真理なのだった。うなづくほかを彼は知らない。悪の化身は泣いた。赤ん坊のように泣きじゃくった。感情の発露ではなく、息をするために必要なことだった。もう僅かになってしまった時間を、生きるために。ハネダの手が彼の背をさするとき、彼は中学生男子でも、魔法を使えるあどけない少女でもなく、

百二十も死んで、生きた魂なのだった。彼は終わりを感じながら、なお口を噤む。

その日二人は魔法のノートに一行も記さなかった。

時は満ちた。

私は彼女を愛する。

私は彼女と、彼女との永劫の眠りを愛する。

おお、その長い長い旅の甘美さよ！

創造主よ！ あるいは悪魔よ！

祝福を露とし我らにしとど降らせよ。

時は満ちたり。

幕を落とせ。

虚構を為すすべてのものに知らせよ。

いまや喪に服すとき。

いまや喪に服すとき。

E N D

月刊缶じうす学祭号 通巻192号  
2013年 10月22日発行  
編集人 芹沢一 千歳緑 前崎一成  
印刷所 広島大学文団BOX